

# 第5回 あおもり立志挑戦塾

平成22年10月23日（土）～24日（日）

今年度第5回目の「あおもり立志挑戦塾」を、10月23日～24日、青森公立大学国際交流ハウスで開催しました。講師のジェフリー・アイリッシュ氏（ノンフィクションライター、鹿児島国際大学准教授）は、この世に生を受け、これまでの人生で深く刻まれた経験と、生きていく上での基本的な考え方について、お話ししてくださいました。

私は、男三人兄弟の真ん中、1番可愛い子として生まれました。弟は生まれつき心臓が悪くて、5歳までしか生きることができなかった。そして、12歳で年子の兄を亡くしました。私は12歳の時に、弟も兄も亡くし、人間のたくましさと、人は簡単に亡くなるものだということを学び、両極端の間に我々が生きているんじゃないかなと考えました。

20代の私がかかなり大きく影響を受けた体験の一つは、アラスカの誰もいない所をカヌーと山登りを繰り返して2週間旅したこと。夏は2時間ぐらいしか暗くならなくて、逆に冬はほとんど明るくならなくて、オーロラが見えたりするところ。こういう人間が自然より極端に弱くなる環境がとっても好きで、生きるか死ぬかの境の世界に興味を持ちます。



もう一つ自分に大きな影響を与えたのが、20代後半、エルサルバドルに行き、そこの政府にアメリカが1日1億ドルのお金を投資していたことを調べて、帰ってきて記事を書いたこと。この時から、自信を持って何かを言うためには、自分で足を運んで、自分で見て、自分で聞いたりしないとイケないということが、自分の中ではっきりしました。

3番目の体験というのは、30代に入って間もなく、祖父と旅をしたこと。祖父が先祖のことをいろいろ調べたり勉強したりしていて、その先祖が住んでいた土地を全部見てみよう、祖父と2人で1か月旅しました。綿農家をしていた、4代ぐらい前の先祖が住んでいた土地、5代前に住んでいた土地、6代ぐらい前、アイルランドから渡ってきた石切屋だった先祖が仕事をしたらしい土地を巡った。それは、最高の旅でした。

12年半ぐらい前から住んでいる川辺町<sup>かわなべ</sup>（鹿児島県南九州市）で、4年前、自分が小組合長になったのは、とっても幸せなこと。この外国の40何歳の人が、方言しか話されていない小さな集落で、集会の進行をしていることほど幸せなことではないです。寄り合いというのは文化の濃い所。昔からの経験を語り合ったり、いろんな参考例を出し合ったりして、そして、1回でどうするかということを決めることは絶対しないです。話題を1回出して、それを皆さん、1か月ぐらい感じ取って、また次の月にそれに触れて、誰も食いつかない時は、また置いておいて、次の月に出してという、そういう集落の人達のやり方は最高に面白い。生きているということを実感する時です。

日本には、こういう集落にいる知識人で見逃されている人もいれば、世界に通用する知識人なのに、英訳されていないから、知られていない人もいます。その結果、アメリカから見る日本人というのは、限られてしまいます。限られたものだけで日本人をイメージされるのは、私にとって残念なことで、それで少しずつ日本人の業績を紹介しています。

次に、自分の考え方の基本を紹介したいと思います。

日本では、社会人という言葉は20歳になったり、その社会に出ることで自動的に社会人になるというふうに使われていますが、私は、実際に社会に関わることによって社会人になるという定義を作っています。だから私の定義では、4年前に初めて自分が手を挙げて集落の人達も小組合長をさせてくれた時に、初めて自分が社会人になったのです。自分の中では、集落の人達のために何かしてあげているという気持ちではなく、私は、勉強したい、関わりたい、居場所を作りたいという、この3つの気持ちの中で、7年ぐらい住んでいる集落で初めて小組合長になって、各家を必ず週1回ぐらいのペースで歩き回って、とっても幸せな気持ちで自分がやっと仲間になった。集落の仲間達とかという言葉が、小組合長をやり始めて、初めて自分の口から出るようになった。もちろん、関わることによって居場所も生まれた。居場所も、自分が社会人だと感じられるかどうかの一つです。

二つ目。田舎を見る目です。「限界集落」といいますが、一つは、65歳以上が50%を超えていて、もう一つは、冠婚葬祭とかができなくなっている集落。でも、マスコミや多くの行政は、1番目の定義だけで使っています。私の土喰集落は、中心メンバーで計算すれば93%の高齢化率。バリバリ限界集落ですが、立派に機能している。十五夜も道の修理も自分らでやって、よっぽど機能していないのは町の中心部。「限界集落」という言葉が使われているのは、非常に残念なことです。こういう集落は可哀想ではないんです。楽しく一生懸命に毎日を送って、自分らしく生きている人達。だから、「活性化」という言葉、集落の人達には何も通じない。私も、集落にいる人間として、集落の人達といろいろ話し合っただけで感じたのが、集落が無くなることも、集落が生まれるのと同じように自然なことじゃないかと。無くなって残念とか寂しいというのは、誰でも思いますが、でも無くならないがために何かをするというのは、とっても無理がある話です。

3番目。文化や歴史は、我々から離れたものではなくて、我々一人ひとりの日常生活で作っているということ。今日やることの積み重ねが、文化も歴史も作っているという気持ちで生活するのも大切だと思います。ほかの人の感覚とちょっと反対だったりするかもしれませんが、今、経済的に行政や企業に余裕がないほどチャンスだと私は思います。自分もその場に住んでいた一人として、手を挙げた、いろんな人達のアイデア、全て実現しています。今は、動き時だと思います。ほかに動いている人が少ない分、経済状況が悪いほど、動きたい人が動けると思います。また、例えば、私の住んでいる集落に日本人の誰かが来て、小組合長をやったりとか、空き家を借りたりとか、同じことができると思います。でも、それが朝日新聞に取り上げられることは、多分、ないと思います。それは、日本人同士だから、注目されないということ。私は、よそから来ていて目立つから、日本人と違う意味のチャンスが回ってきていると思っています。でも私は、自分が外国の人だから与えられているものと、自分が本当に何か特別に持っているから与えられているものの区別がとても大切だと思っています。



野田先生がエリートに触れられましたが、私は、エリートとは、親が特別金持ちでなくても教育に関心を持った家に健康な体で生まれてきて、食べること、住む所、着るものを心配しないで暮らしてきている人だと思います。その意味では皆さんも私も一緒のエリート。そして、エリートほど責任があると思います。エリートの恵まれた立場をモチベーションとして、日々の生活を大切にできればいいと思います。